

それでは、**マタイの福音書 7 章 24 節**から終わりまで、**29 節**まで、たった 5 節しかありません。ここは『山上の説教』の最終結論の部分です。『山上の説教』というのはちなみに**マタイの福音書の 5 章**から始まっております。まずは『八福の教え』という、または『至福の教え』。それが**5 章 3 節**から『心の貧しい者（厳密には“霊において貧しい者”）は幸いです。天の御国はその人のものだから。悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。柔和なものは幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。義に飢え渴くものは幸いです。その人たちは満ち足りるから。あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。平和をつくるものは幸いです。その人たちは神の子供と呼ばれるから。義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。』このようにして何が幸いなのか、イエス・キリストはまずここで神の国の憲法なるものを、この世とは全く異なる幸福感をもって、異なる祝福の道を示すことによって、この『山上の説教』を始めております。これらの言葉はクリスチャンじゃない人たちにもよく、有名な言葉なので耳にされていると思います。同じようにこの『山上の説教』の中には最早日本語としても慣用表現・ことわざのようにして使われているような有名な教えも多く見られました。最たるものは『黄金律』と呼ばれるものです。**7 章**の方に『黄金律』と呼ばれるものがあります。それらも私たちはよく耳にしているんですけども、そういう有名な教えの結論部分、それが**7 章**の最後の部分ということです。今まで説教の部分詳しく学んで来ましたが、その説教が厳密に終わっているところは**7 章 12 節**までであります。**13 節**からはその説教の適用と言って良いと思います。教理の適用、原理の応用、原則の実践、英語で言うアプリケーションというのが丁度**7 章 13 節**から始まっているんです。ですから厳密な意味では『山上の説教』の説教の部分は**7 章 12 節**まで。その**12 節**が『黄金律』として”Golden rule”として有名なところ。『それで何事でも自分にしてもらいたいことは、他の人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。』これが聖書だと言って、イエスはここで説教を締めくくっているんですが、それで終わらないのは、そのあとが最も大切だからであります。教理に対して適用、これが最重要であると。適用と言ってもピンとこない人は、教えられたことを自分の生活に当てはめる。学んだことを、聞いたことを実践していくのがこの適用の部分です。これが『山上の説教』の結論の部分で、その結論の中の結論、それが最後の**24 節**から**29 節**までというところ。正確には**27 節**が結論部分で、そこに最後に**28,29 節**とコメントが付け加えられているということなんですけれども。適用がなければ、実践がなければ、説教というよりもむしろそれはただの講義ということです。ある人たちはバイブルスタディを聖書の講義だと思っているかもしれません。「聖書を勉強しに来ました。聖書について学びに来ました。」確かにそう考えれば、それは講義と言っても良いと思いますけれども、説教は講義とは厳密には異なります。説教には必ず適用というものが含まれます。で、それがなければ、説教とは最早言えません。20 世紀の最大の説教者として名高い D.M.ロイド・ジョーンズという人が『山上の説教』の一番有名な注解書も書いています。『山上の説教』というタイトルの山上の説教の注解書も書いてます。そのロイド・ジョーンズがこういうことを言っています。「説教は会衆に何かを行なうことを意図している。」説教は会衆に、聞く者に、行なうことを意図している。何かを行わせることを意図しているんだと。それが適用ということです。聞いたことをそのまま私生活に当てはめ、信仰生活、教会生活、ミニストリー、奉仕に、宣教活動にそれを当てはめるということです。

また 16 世紀から 17 世紀にかけて活躍したフランスのカトリックの司教で、教会博士という称号ももらっている人がおられて、フランスワッド・サルという人です。この名前はあまり聞いたことがないと思いますが、この人が言っていることがとても素晴らしかったので敢えて引用させていただきます。フランスワ

ッド・サルの言葉です。

『説教者を判定する鍵は会衆が立ち去る時、「何と素晴らしい説教だろう。」と言うのではなく、「よし、何かをしよう。」と言うかどうかにある。』

この言葉はいつも私の心に刻みつけられています。説教が終わったあとに皆さんが「今日はいいお話でした。」と言ったら、私はとてもがっかりします。そういうことを言われて嬉しい時もあるんですけども、でもむしろ「よし、何かをしよう。今日教わったことを早速実行に移してみよう。」口に出さないまでも、そのような思いでこの場所をあとにするならば、私は今日説教した甲斐があったと、何時間も準備の時間を費やして皆さんの前にこうしてお話出来たことは本当に良かったというふうに思えるわけでありまして。どうして説教はそのような適用を促すのでしょうか。もちろん説教と言っても、その内容が御言葉に沿ったものでなければ、そのような適用は引き出されないかもしれません。ただの世間話、お涙頂戴の感動話、いろんなたとえを織り込んでその中にチョロチョロと御言葉が付け加えられている程度のいわゆる説教ならば、適用というものはそれほど強調されないで、良いお話で終わっていくかもしれません。また、無味乾燥に講義のようにしていわゆる説教ということで聖書の講義をする場合もあるわけですが。でも、本物の説教というのは、本来は行なうことを意図しているものだ。何故そう言えるかと言いますと、説教の中心が、そのすべてが御言葉であるならば、御言葉をそのまま御言葉として混ぜものをせずに、ピュアに、純粹に解き明かしてそれを伝えるならば、御言葉自体が実は私たちに行ないを促すものであるからです。ですから、御言葉の説教というものは、必然的に私たちに行ないを促すものとならなければいけないということです。逆に御言葉の説教がもし行ないを促すようなものでないならば、それは最早御言葉を伝えているとは言えない、御言葉を宣教しているとは言えない、何かどこかがずれている、おかしい、欠けているということになります。御言葉そのものにそのような性質があるんです。御言葉そのものが私たちに行ないへと誘う、導く、そのような働きをする、そのような効果若しくは効力を持っているということです。説教そのものというよりも、本当は御言葉そのものにそのような性質があるということです。

事実へブル 4:12 にこういうふう書いてあります。皆さんも良く知っている聖句です。『神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。』神のことは死んでいないんです。神のことはただ印字された字じゃないんです。神のことは生きています。で、力もあるんです。だから、何もしないんじゃないんです。何かをする力を持っているんです。両刃の剣よりも鋭くて、心理学を持ってしても、精神分析学を持ってしても分析出来ないような心の隅々まで、奥深いところまで、その人の過去・現在・未来のすべてを刺し通す、見通す、あからさまにする、そのような力を持っているんです。そのような効力・効果を持っているんです。それが御言葉というものですから、御言葉の説教はそもそもが何かをするという御言葉の性質をそのまま反映しているわけです。同じく今へブル人への手紙をお開きであるならば、11章3節も併せて読みたいと思います。『信仰によって、私たちは、この世界が神のことで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るので。』凄いことが書いてあります。この世界は、この宇宙はすべて神のことで造られた、創造されたと言われている。「光があれ。」と言ったら、光があったんです。ことばだけですべてが造られたんです。私たちも神のことで造られた存在だったわけです。最初の人アダムとエバはそういうにして神のことで造られたわけです。

で、そのような創造する力、無から有をつくり出すようなパワー。それを御言葉は持っているわけです。望み得ないところに、希望が何も無いところに、この御言葉が希望を作り上げるわけです。

また、他にもいくつかの聖句を皆さんと一緒に開いて読んでいきたいと思うので、もしついてこれないと思う方は、せめて聖書の箇所だけメモして頂いて、あとは耳で聞いて下さい。お馴染みの箇所を沢山今

読み上げますので、聞いて頂きたいと思います。イザヤ 55 : 11 を今度は開きたいと思います。『そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。』神のことばは黙っていません。神のことばは必ず神の望むこと、願うこと、神のみこころ、ご計画を成し遂げる。そのような力を持っているわけです。

そして、第2 テモテ 3 : 15 をお読みしたいと思います。『また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて（聖書はあなたに知恵を与える。知恵のない人に知恵を与えることが出来ます。そして）キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができる。』とも書いてあります。御言葉の効力・効果というものです。聖書はあなたに知恵を与え、聖書はあなたにキリスト・イエスに対する救いまでも備えると。

また、他にもマタイ 4 : 4 にある有名なことばがあります。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』のです。聖書のことばは、神のことばは、あなたを生かすのです。あなたを養うのです。パンが私たちの体を養うように、御言葉があなたの魂を満たして、強めるわけです。成長を促すわけです。

同じことが使徒の働き 20 : 32 にも書いてあります。『いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。』御言葉は私たちを霊的に育成します。健全なクリスチャンに成長させるのは、この御言葉であります。『生まれたばかりの乳飲み子のように、みことばの乳を慕い求めなさい。』とペテロは言いました。これは第1 ペテロ 2 : 2 に書いてあります。

また、ローマ 10 : 17 には『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。』と。聖書はあなたに信仰までも与えます。「私には信仰がありません。信仰が足りません。信仰が薄いです。弱いです。」と言う人は、是非聖書を開いて下さい。聖書があなたに信仰を与え、聖書が弱っている信仰を強めます。

また、神のことばはあなたをきよめます。「御言葉の水の洗いをもって私たちをきよめる。」と、パウロはエペソ 5 : 26 で語っています。また、イエス・キリストもヨハネの福音書 15 章 3 節で『あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。』とおっしゃって下さっています。

同じくヨハネ 17 : 17 にも（『真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。』）真理のことばが私たちをきよめるとイエスはおっしゃいました。きよめられたいと思うならば、聖書を開いて下さい。前にも話したと思いますが、何故この教会には日曜日ばかりでなく、水曜日の午後も、金曜日の午後も、金曜日の夜も、こんなにも毎回、複数回同じ人たちが足繁く教会に通って御言葉を学ぶんですか。その理由は、その人たちが汚れているからです。きよめられる必要があるので1回では足りません。日曜日だけではとても足りない。この汚れはとても洗い落とせません。ですから汚れているという認識を持っている人たち、そのような自意識を持っている人たちは、必要を感じて来るわけです。来なければいけないから来るわけではありません。勉強しなければいけないと思って通って来るんじゃないです。御言葉がきよめることを知っているからです。そのきよめの効果をもう味わっているからです。ここで学んで本当に御言葉によって洗いきよめられている体験をしてしまったら、もう止められません。毎回毎回、毎日のようにシャワーを浴びて、お風呂に入って体をきよめるように、洗うように、もう御言葉がまさにそのような習慣となって私たちをきよめて、気持ちいい気分になるわけです。罪が赦され、罪がきよめられる。

そして、そればかりでなく、罪を犯させないようにもするのが、この御言葉の素晴らしいところでもあります。これは詩篇 119 篇『御言葉の讃歌』というところに書いてあります。9~11 節をお読みします。『9 どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ること

す。(私はもう若くないので関係ないと思わないで下さい。若くないからもう手遅れだと思わないで下さい。靈的に若い人たち。まだ未熟だと自覚している人たち。是非、どのようにして自分の道をきよく保てるのか。それはあなたのことばに従ってそれをまもることです。これは今日のテキストのテーマとなっている部分と共通の教えを説いています。ことばに従って守る。そして) ¹⁰ **私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。(祈っています。さらに) ¹¹ あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを(頭にたくわえましたとは書いてありません。)心にたくわえました。』と。どうやったら自分の道をきよく保てるのか。どうしたら罪を犯さないで歩むことが出来るのか。御言葉を頭ではなくて、心で受け止める。前にも話した通り、天国と地獄の距離はどれくらいあるのですか。もう MGF の皆さんは模範解答を、正答を言うことが出来ると思います。天国と地獄の距離はたった 30センチしかありません。その 30センチは、この頭と、そしてこの心臓のハートの部分です。ですから、頭だけの詰め込みの情報や知識をただ獲得するための聖書講義のような学びならば、その学びはあなたを天国へは導きません。でも、私たちはこの御言葉を心にまで下ろして、心の知識として受け止める時、丁度ローマ 10章にあるように私たちが心で信じて、口で告白して救われるという、その心の部分で私たちは御言葉に従うことが出来るわけです。頭では従えません。従うのは、心であります。心で従えるならば、罪から守られるわけです。**

D.L.ムーディーが言っているように、この聖書は私たちを罪から遠ざけます。でも、罪はこの書物から、この聖書から、あなたを遠ざけます。サタンは聖書の効力を私たち以上によく知っています。御言葉は神の武具の中では唯一の武器となっています。防具ではなくて武器です。御霊の与える御言葉の剣です。この御言葉によってイエス・キリストはサタンの誘惑を、荒野の誘惑を、三度とも御言葉によって撃退したわけです。克服したわけです。御言葉にはそのような力があります。誘惑に対して克服する、勝利する力が御言葉にはあるわけです。ここにもいくつか御言葉の効力・効果はあるんですけども、今は本当に典型的なものだけを皆さんにお分ちしています。他にも皆さんはこの聖書 66 卷ありますから、そこからは是非引っ張り出して来て下さい。御言葉はどんな力があるのか、どんな効力があるのか。

もう一つだけローマ 15:4『昔書かれたものは(これは旧約聖書のことを特に指しています。)、すべて私たちが教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。』聖書はあなたに忍耐も与えてくれるんです。「私は短気です。すぐにカッと来るんです。すぐにムカついてしまうんです。」そういう人には聖書という処方箋があります。聖書によって忍耐を得て頂きたいと思います。すぐ落ち込むんです、という人は聖書によって励ましを受けて頂きたいと思います。すぐに失望し、すぐに絶望するあなたにも、この聖書は効力を発揮します。先にも触れたように、聖書は全宇宙をつくったわけです。無から有をつくりだしたものですから、「希望が持てない、希望が潰えた。もう何も無くなってしまった。すべて失いました。」その時にこそ、御言葉がクリエイティブな力を発揮します。宇宙をつくったと同じこの力ある御言葉があなたに必要なものを必ず備えてくれます。そのようにあなたは神の言葉を知っているでしょうか、信じているでしょうか、使っているでしょうか。御言葉はあなたの口にあります。今書かれた言葉としても、あなたの手の中にあります。身近なところにあるんです。アクセス可能なんです。いつでもあなたはこの言葉を読むことが出来ます、学ぶことが出来ます、引用することが出来ます、暗誦することが出来ます、教えることも出来ます、分かち合うことも出来ます。その都度この御言葉がどんなものか思い巡らして頂いて、この御言葉の効力・効果を信じて活用して頂きたいと思います。頭ではなくて、心において実行に移して頂きたい、適用して頂きたいと思います。そして本当に書かれている通りのことが自分の身に起こることを体験し、さらにこの御言葉に対しての喜びと、また飢え渇きをもって、益々熱心に御言葉を学ぶことに従事して頂きたいと思います。

それにしても何故この神のことばというものには、そんな力があるのか。単純には、それは人間のこと

ばではなくて、神のことばだからというのも一つの答えなんですけれども、でも神のことばというのは実は子なる神イエス・キリストのことも表しているわけです。ヨハネの福音書 1 章 1 節には『初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』と。いのちのことばともイエスは呼ばれております。ことばが受肉した神。それがイエスであります。聖書 66 巻の共通したテーマは、究極のテーマは、イエス・キリストであります。これは聖書も明示しているところです。例えばルカの福音書 24 章 27 節をお読みします。『それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について（イエスについて）書いてある事がらを彼らに説き明かされた。』同じく 24 章 44 節『わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて（イエスについて）モーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。』さらにはヨハネの福音書 5 章 39 節から読みます。『あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。（救いがあると思っているから聖書を勉強しています。）その聖書が、わたしについて（キリストについて）証言しているのです。』聖書のテーマはイエス・キリストであります。そのままずっと読み進めて頂いて、例えば 46 節のところにもさっきと同じことが書いてあります。『もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いた（モーセ五書と呼ばれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記のモーセ五書。そのテーマはイエスであると。）のはわたしのことだからです。』「え、あのレビ記もイエスについて書いてあるんですか。レビ記なんかいつも読んでいてイビキになっちゃいます。」とんでもありません。もし、レビ記がイエスについて書いてある、そういう書物だと思うならば、イビキなんてかいてられません。もう目が冴えてしまって、夜も眠れなくなるほど興奮して、エキサイトしてしまいます。これはもう既にレビ記の学びを終えてますから、皆さんもこのことはお分かりになったと思います。無味乾燥と思える律法の集大成。六法全書のように思えるようなそんな古代の外国の法律が、生贄の規定が、大祭司の服装だとか、幕屋の材質だとか、その寸法だとか。何の関係があるのか。「何だ、あの生贄は、血生臭い。動物を屠るなんて、残酷だど。」それらすべては実はイエス・キリストを指し示すものです。「どの民族が何十万にいて。何ですか、このカタカナの名前の羅列は。何ですか、この系図は。」全部それはイエス・キリストを指し示すものであります。その一つ一つをもちろん今具体的に説明するには全く時間が足りないわけなんですけれども、でもこの学びにもう続けて来られている方は、もう実例も皆さんは知っているわけですから、今思いの中に一つ一つ浮かんでいると思います。あの箇所も、この箇所もイエスについて書いてあった。あの物語も、この物語も、この律法もこの食物規定ですら、イエスについて書いてある。ということで、私たちは聖書を開く度にイエス・キリストを人格的に知り、イエスと人格的な交わりを持ち、そしてイエスがどんな方かを知り、そしてイエスがどんなことをされるのかを、見ることが出来ます。体験することが出来ます。そのような説教は当然私たちを行ないへと導くものであります。

19 世紀のイギリスの説教のプリンスとして名高い、当時世界最大の教会を牧会していたチャールズ・ハットン・スポルジョンがこう言っています。「私の兄弟たちよ。キリストを説教しなさい。いつでも絶えずキリストを説きなさい。キリストこそ福音の全体であり、キリストの人格、その務め、その御業は、我々の唯一の偉大にしてすべてを包括する主題でなければならない。」説教は御言葉を説教するものでなければいけません。その御言葉の主題は徹頭徹尾イエス・キリストであります。イエス・キリスト以外のテーマは無いと言っても良いわけです。イエスがすべての私たちの課題を、私たちの必要な教えを、ニーズをカバーしているということです。イエス・キリストが私たちのすべてのすべて。イエス・キリストが一切のものを一切のものによって満たす方。だから私たちはイエスだけで十分なんです。イエスだけ聞かされればそれで十分なんです。それですべての答えを得ます。御言葉にはいろんな効力がありますが、実際のところは、厳密なところは、御言葉を通してイエス・キリストがそのような効力を発揮するということで

す。御言葉を通して神が働くんです。御言葉を通して神の創造の力が発揮されたように、御言葉を通してイエスの力があなたの身にも、信じるあなたの内にも、それが起こるといことです。だから、御言葉を学ぶことを私たちは何よりも楽しみ、喜び、そしてこれを私たちの日々の、三度三度の食事以上に欠かせないもの、重要なものとして捉えているわけであります。勉強しなければいけないからじゃないんです。まさにそれが必要だからです。空気を吸うように、ご飯を食べるように、水を飲むように、それが私たちに必要だからです。

で、今はどこがテキストか、皆さん覚えていますか。**マタイの福音書 7 章**です。戻って頂きたいと思えます。この **7 章 24 節から 29 節**は、『山上の説教』全体としても、皆さんはもう馴染みになっていると思えますが、特にこの最終結論の部分もよく知っていると思えます。日本人もこの話は知っていると思えます。実際にこの話から“砂上の楼閣”なんていう言葉も生まれて、日本語としても定着しているところがあります。他にも“狭き門”とか、“豚に真珠”とか、そういった言葉は『山上の説教』から取られているわけです。“砂上の楼閣”と言われている部分は、今から見る **7 章 24 節から 29 節**のところ。一度通してそこを読みたいと思えますので、目で追って見て下さい。『**24 だから**（結論部分です。山上の説教の中で度々“だから”という言葉が出てきましたが、その都度その都度結論を言っているんですが、これは結論の中の結論、最終結論です。）、わたしのこれらのことばを聞いて（これらのことばが、マタイ 5 章 3 節から 7 章 12 節までのことばです。だから神の国とその義をまず第一に求めなさい。その“だから”も、この最後の“だから”で結論づけられるわけです。）それを行なう者は（ことばを聞いてそれを行なう者は、実行する者は）みな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。²⁵ 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。²⁶ また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。²⁷ 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。』²⁸ イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。²⁹ というのは、イエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。』と。実はこの部分は O 兄が救われた箇所であります。前に聞いたことがあります。「私はこの箇所を通して救われたんです。」と、熱心に語って下さいました。

で、その有名な箇所、特に『山上の説教』の最終結論と呼ばれるところ、そこが私たちの信仰生活の、教会生活の最終結論となるべきところでもあります。先程紹介した D.L.ムーディという 19 世紀のアメリカの大衆伝道者です。彼は「**聖書が与えられているのは、知識を増やすためではなく、人生を変えるためにある。**」と。人生が変えられるために、今私たちはここに集められているんです。皆さんの人生を左右する、それがこの聖書でなければいけません。実際に今読んだところには、人生がまさに左右されている。そういうたとえがなされていました。一つは岩の上に建てた家。それは賢い人にたとえられていました。もう一つは砂の上に建てた家。同じ家です。同じ人間が建てたものですがけれども、砂の上に建てた家は、愚かな人が建てた家だと言われています。で、そこに同じように洪水がやって来ます。同じように人生の試練が、賢い人にも、愚かな人にも、同じ家を建てた人にも襲ってくるわけです。見た目はあまり変わりません。何が違うのか。それは読んで分かる通り、土台が違うわけです。同じ人間が建てた同じ家ですがけれども。大きい家か、小さい家かは書いてありません。同じ家です。ただ土台だけが違うということがここに明確な違いとして際立っています。一つは岩の上、もう一つは砂の上です。見えない部分です。私たちの人生の土台も見えないところに建てられなければいけない。そしてそれは揺るがぬものでなければならぬ。具体的にはその“岩”というのが、御言葉を聞いて行なうという人です。“砂の上”というのは、御言葉を聞くは聞くんです。でも、行わない。これは実に愚かなこと。聞く時は喜んで聞きます。

このあとを読み進めていくと**マタイ 13 章**に種まきの物語、たとえが出てきます。御言葉が種にたとえら

れています。その種が4つの土壌に蒔かれていきます。あるものは道の踏み固められたところの上、あるものは岩地に、あるものは茨いばらの中に、あるものは良い地という、耕されて多くの実を結ぶというそういう良い地に蒔かれるわけです。そこにも御言葉を聞いて行なう者が良い地に蒔かれたものであると。そしてその者は多くの実を結ぶとイエスは結論付けられています。

マタイ7章のこの山上の説教の最終結論の部分でも同じことが言われています。「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べられる。」と。これまでもずっと13節のところから適用が始まっていたわけです。狭い門から入りなさい。そこからもう適用が始まっています。そこには2種類の門が言われています。狭い門と滅びに至る広い大きな門。狭い門の方は命に至るものです。それはサイズとして小さく、その道は狭いと。2つの門、2つの道というふうにも言っても良いと思います。狭くて小さい門若しくは道。そして広くて大きな門。でもそれぞれ導く先は全く異なります。狭い門は命に至らせるわけですが、広い門の方は、大きな道の方は滅びに至らせるものです。同じ門なんです。でも全然違うわけです。行き着く先が違います。ゴールが違うわけです。結果、結論が違うわけです。

その後には2本の木が今度は出てきます。良い実をならせる良い木と、悪い実をならせる悪い木。そして24節には2つの土台について、若しくは2つの家について、若しくは二人の人。賢い人か、愚かな人か。その間にも「主よ、主よ。」と言う人。口先だけで「主よ、主よ。」と言って、イエスの名によって預言をしたり、悪霊を追い出したり、奇蹟を沢山行なったという人。でも、彼らはイエスによって「全然知らない。」と言われます。その一方で父のみこころを行なう人は天の御国に入ると言われています。それは2本の木との関連で言われているんですけども、そこにも2つの対比、対称が描かれています。見た目は分かりません。まるで羊のように見えます。まるでクリスチャンのように見えます。羊の皮を被った狼、それは偽預言者だと言われて、気をつけなさい。でも、見た目は羊にそっくりなんです。「主よ、主よ。」と言うんです。イエスの名によって預言をしたり、イエスの名によって悪霊を追い出したり、イエスの名によって病気を癒やしたり、奇蹟を行ったり、そういう目醒めざましい人々を魅了するような、感動させるような、まるで聖霊に用いられているような大きな働きもやってのけるんです。でも、その人たちが必ずしも天の御国に入るのではないと。むしろ、父のみこころを行なう者が、みこころを知っている者ではなくて、みこころを行なう者が天の御国に入るんだと言われておりました。そのようにして13節から二つに一つ、二者択一の選択が適用としてイエスから私たちにも迫られているわけです。どちらをあなたは選ぶのか。今まで聞いてきたことを、学んできたことを、教えられてきたことを受けて、あなたはどちらを選ぶのか。二者択一です。比べると似たり寄ったりというところも確かにあるかもしれませんが。でも実際にはその行き着く先、その結果というのは全く異なるということです。

このたとえ話の中で、人々は雨が降って洪水が押し寄せるという場面も実際にこの気候のことを知っている人たちですから、よくイメージ出来たと思います。これはガリラヤ湖の山腹で語られているので、『山上の説教』と言われているわけです。そのガリラヤ地方では年間1000ミリの降水量の雨が記録されています。その1000ミリの降水量の大半は雨季に集中するわけです。乾季と雨季しかないわけです。その雨季に沢山土砂降りのような雨がいっぺんに降るわけです。あとは、ほとんど乾季の間は、雨が降らない状態です。ですから、日本の雨とはちょっと違うわけです。しとしと降るといよりも集中豪雨のような雨も降るわけです。そして、急にワディと呼ばれる荒野に、川が出来るところか、本流が出来て、そしてそれによって人も流される。ですから現代でもそういう時にはバスも流されたり、車も流されたりするので、通行止めになることもあるわけです。そのような凄まじい豪雨によって押し流される洪水が発生する。そういう気候であります。でも、その時でも岩の上に建っている家ならば、その豪雨にも耐え忍び、その洪水にも押し流されずに堅く建ち続けると。人生にも時として急に青天の霹靂へきれきのようなことが起こるかもし

れません。今まで順調だったのに、急に雨季に入ったようで、それはイスラエルでは冬の季節ですけれども、気温も下がります。急に人生が冷え込んできた。急に豪雨が、土砂降りが降ってきて、そして気が付いたらもう洪水が目の前に迫って、もう押し流されそうになっている。どうしようと、その時に慌てももう手遅れなんです。死に目の時になって初めて聖書を開いて、そして聖書を一生懸命読んで、学んで、一生懸命適用して、そして実行しようと。でも、大雨の時にはもうそう思っても手遅れなんです。逆境の時にそれをしようと思ってももう手遅れなんです。あっという間に押し流されてしまうんです。しとしと降りながら段々雨の量が増えて、段々水の量が増えていくんじゃないんです。急にやって来るんです。その急な時に私たちは備えてなくてはいけません。御言葉を普段から聞いて、読んで、学ぶ。大事ですけども。それを実行に移さなければ、いざという時には何の役にも立たないということです。折角毎日聖書を読んでいても、折角このようにバイブルスタディに通っていても、日常の中でそれを実行しなければ、いざという時に、その逆境の時には何の役にも立たないということです。今あなたは特別トラブルを抱えていないかもしれませんが。「今は順調です。すべてが順風満帆です。」と思っているかもしれません。でも、必ず賢い人にも愚かな人にも雨が降るんです。洪水が押し寄せて来るんです。人生の嵐、人生の試練がやって来るんです。その時に泣きを見たくなければ、その時にすべてを失いたくなければ、その時に人生が土台からすべて流されてしまうことを避けたいと思うならば、今から、この乾季の時、この順境の時から、あなたは御言葉を聞いて、行なっていかなければなりません。「でも、今私は現在まさに集中豪雨に見舞われているんです。今現在私の人生は雨季です。冬のシーズンを迎えて洪水に今見舞われているところです。すべて押し流されそうになっています。」さっき手遅れだと言いましたけれども。でも、今現在あなたは嵐に遭遇している、洪水に見舞われているならば、主のあわれみがあることを知って下さい。今晚あなたは現にここに招かれて来たわけです。招かれたということは、手遅れなことをあなたに神様がわざわざ追い打ちをかけるように、ダメ押しをするように言うためにあなたを呼んだんじゃないありません。そうではなくて、あなたのまだ助かるという最後のチャンスを主は今晚あなたに与えておられるのかもしれませんが。これを逃したら本当に流されてしまうかもしれないんです。諦めかけていた人がいるならば、もうなるがまま、流されるがまま、「もう私の人生はどうにもならない。もう洪水ですべて押し流されて終わりだ。」と諦めかけた人でも、今日ここにあなたが来たのは偶然ではありません。主が呼んでくださったので、来たんです。来たくて来た人もあるかもしれませんが、来たくなくても来ましたという人もあると思います。人から誘われたから来ました。たまたま来ました。でも、来たくても主が許可しなければ来れないんです。ここは私の教会じゃないんです。ここはイエス・キリストの教会なんです。教会の^{あるじ}主はイエス・キリストなんです。勝手に人の家に来て、「お邪魔します。」と言っても普通は入れてくれません。前から知っている友達とか、アポイントがあれば、それこそ待っていました、歓迎しますと。招待されたならば当然皆さんは家に入出入りすることは出来るわけです。でも勝手に来ても、呼んでないよと、招いていないよ。入れないわけです。でもイエスが今日あなたをここに呼んで下さったんです。ということは、イエスは今日あなたに御言葉を通して最後のチャンスを与えておられるということです。まだあなたも賢い人になれる。今は愚かな人にしかあなたは自分を見ていないかもしれません。「振り返っても私は愚かなことばかりしてきた。私の人生は全く愚かしいものだった。後悔しかない。無駄なことをしてきてしまった。あの時ああしておけば良かった。あんなに時間があったのに、あんなに自由があったのに、あんなに暇だったのに、あんなにチャンスがあったのに。全部無駄にしてきてしまったと。」でも、主は今晚あなたにチャンスを与えています。もしかしたらこれが最後のチャンスかもしれません。御言葉を聞いて、今晚中に行なう。それによって再びあなたの人生はまた堅固なる岩の上に、救いの岩の上に建て上げられることになります。決して遅すぎないということを知って下さい。イエス・キリストは御言葉のテーマだと言いました。御言葉を聞いて行なう時、あなたはイエスを自分の人生の土台とすることが出来ます。イエスはどんな洪水に

も揺るがないお方です。押し流されない方です。どんな試練もイエスには何の力も発揮しません。私たちは自分の家を、自分の人生を設計するんですけども、イエスの上に、この岩の上に人生を建て上げるならば、あなたの家がどんなにみすぼらしくても、^{やすぶしん}安普請でも、それこそタン屋根でも大丈夫です。岩さえしっかりと土台としているならば。どんな洪水が来てもびくともしません。ですから、今からでも家は建てられます。でも、土台を間違ったら大変なことになります。あなたはどちらの土台を選びますか。2つの門のうち、どちらの門を選びますか。狭い門ですか、広い門ですか。狭い道ですか、広い道ですか。どちらの木をあなたは選びますか。そしてどちらの土台を選びますか。それがイエスが『山上の説教』の適用の部分で私たちにチャレンジされていることです。説教を聞くこと、それも為になると思いますし、勉強になると思いますし、有意義な時間になると思います。でも、ただ聞くだけでは、ただの講義で終わります。「良いお話でした。」で終わってしまうわけです。でも、本物の説教をあなたが聞いて、皆さんもこの2つに1つの選択を今晚正しい方を選ぶならば、良い方を選ぶならば、その御言葉をしっかりと、そこで聞いた説教をしっかりと自分の心に向けて、そしてその心で応答する。具体的にそれを当てはめるといことです。適用は、こうすべきだとか、こうすべきでないとか、こうしなければいけない、あぁしなければならない、その聖書のメッセージを通して聖霊があなたにちゃんと迫ってきます。2つに1つどちらをあなたが選ぶのか、そのように促しがあります。どちらも選びませんという人もあるかもしれません。どっちつかずという人もあるかもしれませんが、そのようなグレーゾーンはありません。2つに1つしかないイエスは言われています。選ばないのも1つの選択です。岩の上か砂の上か、どちらも選びませんという人は、その人は家を持たずにただ滅びていくだけでありです。そのまま選ばないというのも1つの選択であるということです。これまでの『山上の説教』の素晴らしい宝石のような言葉、真珠のような言葉、黄金のような言葉、それもただ聞くだけではただの格言、ことわざ、その程度です。若しくは教訓だとか道徳律という程度で終わってしまうと思います。でも、これが実際に皆さんが聞くだけではなく、行なうということをするならば、計り知れない効果を発揮するということを知って頂きたいと思います。今はその効果があまり感じられないかもしれませんが、いつか必ずあなたの人生にも試練がやって来ます。嵐が襲ってきます。集中豪雨があつて洪水があなたの人生を襲います。その時に本当に真価が発揮されるんです。普段あなたがやっていることがその時に実を結ぶと言って良いと思います。本当に良かった、助かったと言える日が必ずやって来るんです。だから今聖書を学んで実行しても特別何も御利益のようなものはありませんとか、目に見えるような肌で感じられるようなそういう実感がない、そういう感覚がないと。全然何も起こっていないように思うかもしれません。でも、いざという時に、いつかの時にはそれがハッキリ分かる日がやって来ます。

もう一度聖書の他の箇所を開いて頂きたいですけども、**第2テモテ3：16～17** そちらも開いて頂きたいと思います。『¹⁶ **聖書はすべて、神の靈感によるもので**（端的に言えば聖書はすべて人の書いたことばではなくて、神の言葉であるということです。そして）、**教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**¹⁷ **それは、神の人が**（あなたのことです。）、**すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。』** 聖書はただの道徳訓ではありません。聖書はただの良い話ではありません。ただの物語じゃないんです。ただの文学じゃないんです。聖書は神の言葉であつて、神の言葉は生きていますから、何かを行なうことを促します。“**教え**”というの**は正しいことを示す**ということです。“**戒め**”というの**は間違いを示す若しくは罪を示す**ということです。“**矯正**”というの**はどのようにして正しくなるのかを示します**。最後の“**義の訓練**”これは**どのようにして正しくあり続けるのかを示す**ものです。何が正しいのか、何が間違っているのか、聖書はハッキリとあなたに教えてくれます。自分の経験、自分の良心、自分の価値観、自分がこれまで聞いてきたこと、学んできたこと、この世が言うこと、あの人が言うこと、この本に書いてあること、あのセミナーで言われたこと、いろんなことを私たちは聞いてそれを基準に何が合っ

いるのか、何が正しいのか、何が良いことなのか、いろいろ私たちは判断基準を持とうとするかもしれませんが、聖書は真理の言葉ですから、聖書だけがあなたに正しいことを示してくれます。そして聖書だけがあなたに間違いを、罪を指し示すことが出来ます。そして聖書だけがあなたをどのようにして正しくするのか、その術も教えるだけではなくて、実際にあなたを正しい者に変えて下さる、そういう力を持っています。でも、正しくなってもまた間違ふこともあるわけです。ですから、義の訓練をもって、どのようにして正しくあり続けるのか、そのことまでも聖書はすべて整えて備えてくれるわけです。その聖書を皆さんは今手にしています。その聖書を今皆さんは耳にしています。で、口にすることも出来ます。頭ではなくて、それを心で捉える時に、今お話したようなことがすべてあなたの身に体験されます。是非これまで頭で聖書を理解しようとしていたならば、頭で聖書を捉えて理性だけで何とか把握しようとしていたならば、それではまさに砂の上に建てた砂上の楼閣をあなたは建ててしまうことになります。いざという時にはその聖書の言葉は何の役にもたちません。折角高いお金を払って聖書を買ったのに、御言葉を聞いて実践しないならば何の役にも立ちません。まだトイレットペーパーの方が役に立ちます。聖書の紙でお尻を拭くのはちょっと痛いと思います。無用の長物、宝の持ち腐れということです。ですから、御言葉を頭から心に是非下ろして欲しいと思います。シフトして頂きたいと思います。

今からまた幾つかの聖書を読み上げますから、それを聞いて下さい。御言葉を頭にではなく、心に引き下げる、心に蓄える、心で捉える、心で応答する。これが、聖書が教えているところです。申命記 6 : 6 に『私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。』頭の記憶にはないんです。心に刻みなさい。申命記 11 : 18 『あなたがたは、私のこのことばを心とたましいに刻みつけ、それをしるしとして手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。』御言葉を心に刻みつけるように繰り返されています。ヨブ記 22 : 22 『神の御口からおしえを受け、そのみことばを心にとどめよ。』また箴言 16 : 20 『みことばに心を留める者は幸いを見つける。主に拠り頼む者は幸いである。』ずっと心が強調されています。先程も詩篇 119 : 11 のところでも『あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。』と言われてました。心で信じて、口で告白すると御言葉が働いて、そして私たちは永遠の滅びから永遠の命に至る救いを経験するわけです。心で受け止めないならば、いくら御言葉を聞いてもあなたは救われないんです。いくら勉強してもあなたはクリスチャンにはなれないんです。「私はクリスチャンになりたいと思います。だから聖書を読んでいます。勉強しています。もっと聖書を勉強してから私は信じようと思います。」そういう人はいつまで経っても救われません。頭で御言葉を捉えようとしているからです。頭で理解しようとするからです。他にも申命記 30 : 14 に『まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあつて、あなたはこれを行なうことができる。』この言葉がパウロによって引用されて、先にお伝えした「心で信じて、口で告白して救われる。」というその救いに繋がる素晴らしい結果をもたらすわけです。頭にあつては御言葉を行なうことは出来ないんです。心になくしては、御言葉を行なうこと、実行することは出来ないわけです。興味深いことにイエス・キリストは、人の口は心に満ちているものを話すと、度々教えられました。人の口は心に満ちているものを話すと。心にあるものを私たちは語り、心にあることを私たちは行なうわけです。ですから、心の中に御言葉があるならば、その御言葉はそのまま実行されるという単純明快な話であります。でも心の中に御言葉がないならば、御言葉は実行に移されることはないということです。心が大事です。パウロはローマ 12 : 2 でも『心の一新によって自分を変えなさい。』と言っています。ですから、御言葉を実行したいと思うならば、まずは御言葉を心に刻む、心に置く、心に蓄える、心で捉えるということをしていかななくてははいけません。頭ではなくて、心です。心を御言葉で満たすということです。

これまで『山上の説教』を通して、これは素晴らしい言葉、素晴らしいことわざ、素晴らしい格言、名言と思うようなものを皆さんも聞いて学んできたわけです。でも、それを是非自分のものとして頂きたい

と思います。自分の体験として頂きたいと思います。「八福の教え、素晴らしい教えだけれども、私の人生とは、生活とはそれほど関わりがない。素敵な教えです。でも、私とは関係ない。私は今も幸いでない。不幸ですから。」本当に幸福になりたいですか。この8つの祝福に与りたいですか。ならば、あなたはこれを心で捉えて実行しなくてはなりません。アランレッド・パスというアメリカの有名な聖書講解者はこう言いました。「**私たちが今日必要としているのは、もっと多くの真理ではない。既に知っている真理に服従することである。**」もっと沢山のことを聞かなければ、読まなければ、学ばなければいけないと思っているかもしれませんが、実はそうではないということです。聖書を通読しなければ、完読しなければクリスチャンになれないという話じゃないんです。たった1つの聖句でも、例えばヨハネの福音書3章16節だけでも、『**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**』たったこの1つの聖句だけで人は救われるんです。私もその聖句で救われたんです。それは頭でどうのという話ではありません。心で信じたんです。書かれている通りに信じたわけです。沢山の真理が必要とされるのではなくて、1つの真理に聞き従うことが、本当に今必要とされています。今晚聞いたことの1つだけでも結構です。十の内1つで結構です。他はすぐに忘れても構いません。でも、1つだけでも実践して頂きたいと思います。

また、ディートリッヒ・ボンヘッファーという有名なドイツの牧師がおります。ナチス・ドイツに対抗して闘った牧師です。このボンヘッファーはこう言っています。「**生きたイエス・キリスト不在のキリスト教は、必然的に服従のないキリスト教にとどまり、服従のないキリスト教は常にイエス・キリスト不在のキリスト教である。**」多くの教会は、イエス・キリスト不在のキリスト教会になってしまってます。なぜならば、彼らは御言葉に聞き従わないからです。私たちもそうなり得るんです。御言葉に聞き従わないならば、私たちもキリスト不在のクリスチャンになってしまうんです。名ばかりのクリスチャン、「主よ、主よ。」と言います。そして、イエスの名によって沢山の奉仕をします。「イエスの名によって、あのこともしました、このこともしました、献金もしました、伝道にも行きました、宣教にも行きました。」でも、御言葉に聞き従わないならば、自分にそれを当てはめて実行しないならば、ただ礼拝のプログラムに参加し、ただ教会のプロジェクトに関わり、ただ組織運営に携わるだけならば、ただお金をチャリンと献金箱に投げ入れるだけならば、それはノンクリスチャンでも出来ることです。羊の皮を被った狼でもクリスチャンと同じことが出来るんです。イエスの名によって沢山のことが出来るんです。ちょっとのことじゃありません。

「イエスの名によって沢山の奇蹟を行なったではありませんか。」一個や二個じゃないんです。“沢山の”です。で、それは大勢の人がそうやっていると言われてます。特殊な人たちじゃないんです。そういう人たちが大勢いるんです。私はイエスの言葉を額面通り信じていますから、大勢のクリスチャンという人たちが、実のところキリスト不在のキリスト教ごっこをしている。教会ごっこをしている。名ばかりのクリスチャン生活を送っている。断罪目的でこのことを語っているのではありません。他の教会のことを非難しているんじゃないんです。私たちもそうなんです。他人事と思ってはいけません。イエス・キリストは私たちが裁くためにこの世に来られたのではありません。救うために来られたんです。私たちにイエスが望んでおられることは、「わたしを土台とせよ。揺るがぬ土台がここにある。御言葉はあなたの口にある。すぐ身近にある。これをあなたは聞くだけじゃなくて、行ないなさいと。行なうなら、あなたは揺るがない者となる。何があっても心配ない。」

そして、他のイエスの言葉を借りるならば、ヨハネの福音書13:17『**あなたがたがこれらのことを知っているのなら（これらのことというのは、具体的に文脈からするとあの洗足物語。イエスが弟子たちの汚い足を洗ったというところです。仕えるとはどういうことか、模範を示されたところです。そのことを知っているのなら）、それを（何と書いてありますか。）行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。**』知っているだけでは祝福されないんです。「知ってますよ、ヨハネの13章。有名な箇所ですね。イエスが弟

子たちの足を洗ったところでしょう。よく知っていますよ。教会でもたまに洗足式というのをやりますよ。水虫の人の足だって洗ったことがありますよとか。知っていますよ、洗足式だって行なっていますよ。」でも、本当にイエスが言われているのは、ただそういう儀式を行なえと言っているのではありません。ただ、そういうパフォーマンスをせよと言っているのではありません。人に仕えることを、そしてそれが最も汚いところに触れるということです。誰もやりたくないことをやるということです。やりたがらないことをやる、率先して、誰かに言われるでもなく、イエスは黙々と弟子たちの足を洗ったんです。「汚い足だとか、臭い足だとか。」一切言いませんでした。黙って誰もが触れたくないところ、やりたくない仕事、下の世話のようなイメージを持って頂いて良いと思います。当時の奴隷の中で最低の仕事です。靴の紐を解くという仕事も奴隷の中でも最低ランクの方ですけども、さらに靴の紐を解いたあと足を洗う。これはもう最低の奴隷のやることです。それをイエスは黙ってやられたんです。言われたわけではありません。そのようにあなたがもし行なっているならば、あなたは祝福されると、ハッピーになれるとイエスは言っているわけです。なぜあなたはハッピーじゃないんですか。祝福されているという実感がありませんか。それはただ知っているだけで、聖書の物語はもう沢山読んで知っています。「またその箇所ですか。また山上の説教ですか。また砂上の楼閣の話ですか。よく知っていますよ。子供の頃から聞いています。日曜学校でも学びました。本でも読んだことがあります。あの人のメッセージで聞きました。」でも、それを知っているだけではなくて、行なう時にあなたは祝福される、幸せになる、ハッピーになると。

また、他にもピリピ 4:9『あなたがたが私から学び（パウロから学び）、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。』実行すれば平和の神があなたとともにいるんです。こんなに有り難いことはないですね。こんなに力強いことはありません。平和の神があなたと一緒にいるんです。戦争の最中さなかにあってもです。争いの最中にあっても、平和の神があなたと一緒にいるならば、核爆弾を打ち込まれようと、何の恐れも不安も感じる必要はありません。平和の神と一緒にいるならば、ミサイルが飛んで来ようと、槍が飛んで来ようと、何も心配要らないということです。でも、そのような祝福に与りたければ、あなたは御言葉を実行しなければいけません。

ヤコブ 1:21~22 も併せてお読みします。『²¹ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。²² また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。』ただ聞くだけの者であってはいけないと。聞くだけで満足していないのでしょうか。「今日も自称日本一長い説教を聞きました。満足しましたと。よくぞ私は耐えた。眠らずに今日も頑張れたとか。沢山ノートに取りました。聖書にも線を引きました。印もつけました。蛍光ペンで引きました。ああ満足です。」でも、御言葉を聞くだけの者であってははいけません。ただノートを取るだけの者であってははいけません。ノートを取っても、あなたはそれを開きますか。あとでそれを家に帰ってから、しっかり読んで、思い巡らして、瞑想して、黙想して、祈って、それを実行に移そうと決意して、実際に実行に移しているのでしょうか。やっているのでしょうか。やっていなければ、その時間は無駄だったと思って下さい。そのノートは何の価値も無いということを知って下さい。その聖書の印ばかりつけている、線ばかり引いている、ボロボロになっているその聖書も、人には「聖書をよく読んでいますね。」と褒められるから、一生懸命ボロボロになるまで、一生懸命聖書を読み、印を付けて、如何にも聖書をいっぱい読んでいように見せかけるためにつくっているかもしれませんが、そんなことは何の意味も価値もないということです。「私は信じていますよ。」でも、信じているだけでは不十分なんです。実行しなければ、聞き従わなければです。

ヨハネ 3:36 にもこう書いてあります。『御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。』興味深いことに、1つの節の中に“信じる”という言葉と、そこには“信じない”というふうに使われずに“聞き従わない”というふうに使

えられています。信じる者は永遠のいのちを持つけれども、聞き従わない者はいのちを見ることがないと。普通であれば、“信じる”ときたならば、“信じない者”と書きそうなものですがけれども、言い表そうとするものだと思いますけれども、でも敢えて聖書は“信じる者”と“信じない者”という対比ではなくて、“信じる者”と“聞き従わない者”という対比にしています。つまり、何がここで意図されているかと言うと、信じる者は間違いなく聞き従う者。信じる者は聞き従う者、信じない者は聞き従わない者。私たちに対して、これを聖書は強調したいわけです。信じることは、イコール、聞き従うことです。同義で使われています。同じ意味で使われています。聞き従わないことは、信じていないということです。もし、あなたが聞き従っていないならば、いくら口先で「信じている。頭で信じている。」と言っても、実際には信じていないんだと言っているんです。「イエスを信じています。聖書の言葉も信じています。」でも、あなたはその言葉に聞き従っていますか。イエスに付き従っていますか。そうでなければ、ただ聞いているだけで実行していないということです。そこには、いのちが無いんです。祝福が無いんです。神の力などそこには無いんです。何にも体験出来ないんです。頭は御言葉でいっぱいになるかもしれませんが。知識力はある程度は満たされるかもしれませんが。または、長い話を最後まで聞けたという達成感、若しくは沢山のノートを取れました。その自己満足は得られるかもしれませんが、それは一時のこと、何の役にも立ちません。ですから、是非冒頭に申し上げたように、適用が実は説教の中では最も重要な部分であるということです。適用無くして、説教には何の価値もありません。ただの講義で終わると言っているんです。ただ聞くだけで満足してはいけません。信じるだけでは不十分です。アーメンと言っても、賛同するだけでも不十分です。「アーメン。」と言ったならば、「その通りだ。」と言ったならば、その通りに生きなければ、その通りに行なわなければ、その「アーメン。」は虚しいということです。そんなことをいくら口に出したところで、何の効力も発揮しません。ですから、今皆さんにイエス・キリストが御言葉を通して、御霊を通してチャレンジされています。心を探っておられます。今晚だけの話をしているわけではありません。これまでの話をしているんです。そして、これからの話もししているんです。あなたはクリスチャンとして、これまでも沢山のメッセージを聞いてきたと思いますし、信仰歴の長い人はもう聖書を何度となく通読していると思います。でも、いくつの聖句をあなたはこれまで実行してきたでしょうか。何回実行してきたでしょうか。もし、あなたが聖句を実行に移したならば、その聖句はあなたのものとなって心にしっかりと刻み込まれます。忘れることはありません。でも、頭で覚えた聖句は、頭で聞いた聖句は忘れます。よく「先週のメッセージは何だったか。」と、一週間経ってから、先週日曜日のメッセージを忘れてしまう人がいます。私もかつてそうでした。連続講解説教をしていますと、大体その週で毎回毎回節毎に、章毎に進んでいきますから、すぐにどこを学んだのか思い起こしやすいという利点はありますけれども、多くの場合、「先週のメッセージ、先週の金曜日のメッセージ、一体何だったか。」と、忘れてしまうことがあります。なぜ忘れるのでしょうか。それは聞いたことをひとつもあなたは実行に移さなかったからです。それが意味するところです。「もう年だから。」じゃないんです。「私は昔から物事を覚えるのが苦手です。」じゃないんです。ひとつでも実行するならば、全部覚えてなくても結構ですが、ひとつでも実行するならば、何を聞いたのか、何を学んだのか、絶対に実行した者ならば、忘れません。心に刻みつけられるからです。心の知識となるからです。これについてはスポルジョンがこういうことを言っています。「1グラムの心の知識は、1トンの頭の知識に相当する。」ヘビーなんです。重いんです。軽くないんです。「1グラムの心の知識は、1トンの頭の知識に相当する。」そんなヘビーな体験をしたら、そうそうたやすく忘れる事はないと思います。「先週のメッセージを1週間かけて私はしっかりと背負ってみました。」1グラムの心の知識でも、1トンの頭の知識よりも重いので、その重い体験は絶対に忘れないんです。先週、重い荷物をあなた背負いましたか。そういうことをすれば、忘れませんか。実行すれば、忘れないんです。オズワルド・チェンバーズもその同じラインでこういうことを言っています。「体験の上に置いた信仰は、歯痛、消化

不良、失敗、事故、悲惨なことなどで揺るがされますが、全能なる神様と、主イエス・キリストの十字架に置いた信仰は少しも揺るがされることなく安全です。」と。体験の上に置いた感情的なもの。「ああ、今日のメッセージは感動的でした。素晴らしかったです。いいお話、面白いたとえ話を聞かせてもらいました。ためになる話でした。これで知らなかったことも教えてもらって、良かったです。」その程度の感触ならば、きっと次の週には忘れてしまいます。でも、スポルジョンが言うような1グラムの心の知識ならば忘れません。歯が痛い時も忘れません。消化不良の時も忘れません。胃がむかむかして、体調が悪くて、事故でも、悲惨なことがあっても、その御言葉は絶対に忘れません。そしてその御言葉によって、あなたその試練に立ち向かい、その試練を乗り越え、その逆境に打ち勝つことが出来ます。揺るがない平安を味わうことが出来ます。祝福をその不幸の中に味わうことが出来るんです。でも1トンの頭の知識では、ちょっとした歯の痛みでその1トンの頭の知識はどっかへ吹っ飛びます。「ああ、痛い、痛い。」で終わります。何のメッセージか覚えていません。何を讀んだのか覚えていませんと。このことを是非皆さんにも知って頂きたいと思います。

エミー・カーマイケルもこう言っています。「**イエスの平安は、あらゆる試練や重圧に耐え、決して壊れない。**」イエスは私に約束されています。私たちは世にあっては患難がありますと。患難は避けられないんです。賢い人にも、愚かな人にも、患難は必ず及びます。賢いから試練がない、人生バラ色ということじゃないです。賢くても、愚かでも、患難はあるんです。世にあっては避けられないわけです。洪水は避けられません。津波も避けられません。地震も避けられません。事故も避けられません。愛する人の死も避けられません。倒産も避けられないかもしれません。死も避けられないわけです。ありとあらゆる試練、病氣も避けられません。でも、イエスのその中において「わたしはわたしの平安を与える。」と。この世が与える平安ではなくて、わたしの平安を与える。この平安は、この世のものとは違いますので、大雨が降っても、洪水が襲っても、決して揺るがない、押し流されない平安であります。エミー・カーマイケルが言うように「**あらゆる試練に耐え、あらゆる重圧に耐え、決して壊れない。**」イエスはこのご自身の平安を与えるとおっしゃっているんだと。イエスの平安です。イエスが持っていた平安。イエスが普段味わっていた、経験していた平安と同じ平安が私たちにも与えられる。そのことをあなたは信じていますか。その平安が欲しいですか。喉から手が出るほど欲しいです、と思う人は信じるだけではなくて、それを行なって下さい。『山上の説教』だけでなく、聖書に書かれている一つ一つの聖句。それと真剣に取り組んで下さい。頭で理解しようと思う前に、幼子と同じように書かれている通りに従って見て下さい。心でイエスを主と信じる。心で神がイエスを死者の中からよみがえらせた下さったことを信じるならば、あなたは救われるんです。「**心で信じて、口で告白する者は救われる。そして彼に信頼するものは失望させられることはない。**」と、聖書は約束しています。信じるならば救われるのです。信じなければ救われないんです。信じるならば、従うならば、あなたは揺るがない堅固な岩の上に自分の人生を建て上げることが出来ます。何があってもこれからは恐れなくていいんです。そして、もしあなたが私はまさに名ばかりのクリスチャンでした、サンデー・クリスチャンでした。皆さんはサンデー・クリスチャンではないと思います。フライデー・クリスチャンです。サンデーもフライデーも来ています、水曜日もウエズデーも来ていますという人が多いわけですけれども、それは冗談として、名ばかりのクリスチャン、日曜大工のような日曜日だけクリスチャンになるような人たち。それが私だと、それが今メッセージを聞いているCDの向こうの人、インターネットの向こうの人ならば、是非今晚、主があなたにチャンスを与えているということを知って頂きたいと思います。それは昼間かもしれません、朝かもしれません、夜中かもしれませんが、今その場において、今そこにおいてもう一度あなたは2つに1つを選んで頂きたいと思います。どちらも選ばないのではなくて、2つに1つです。二者択一です。見た目はクリスチャンぽくやってきたかもしれませんが。クリスチャンらしく生きてきたかもしれませんが。その“らしく”が問題なんです。その“クリス

チャンぽい”というのが問題なんです。“クリスチャンのつもり”が問題なんです。“クリスチャンのよう”が問題なんです。クリスチャンか、クリスチャンじゃないか、そのどちらかしかないんです。クリスチャンぽい、クリスチャンらしい。それはクリスチャンじゃないんです。「主よ、主よ。」と言う者、たとえイエスの名によってこれまで沢山のことをしてきたとしてもです。「私はかつて教会で多額の献金をして、教会まで建てました。」それが一体何だと言うのですか。もし、あなたが今クリスチャンとして歩んでいないならば、もしかしたらイエスに「あなたのことなど全然知らない。」と言われてしまうかもしれないんです。従順が伴う信仰だけがあなたを救うんです。従順の伴う信仰だけです。ナイキのキャッチフレーズに、今は違っているかもしれませんが、私が知っている範囲では“just do it”というのがありました。今でも結構気に入っているんです。今でも使います。“just do it”というのが今晚のメッセージです。ナイキというのはもちろんギリシャの女神の名前から来てますけれども、本当に勝利したいならば勝利の女神ではなくて、勝利の真の神に微笑んでもらいたければ、「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と言って、「あなたのことはよく知っている。」全然知らないなんてとても言われぬ。「よく知っている。」褒めてもらいたければ、“just do it”であります。聞いたことを、これまで聞いてきたことを、1つでも良いですから実行して下さい。今晚が最後のチャンスなのかもしれないんです。明日の朝がないかもしれない。明日目覚めることがないかもしれない。イエス・キリストが今晚戻って来られるかもしれないんです。または、今晚あなたがポックリ逝くかもしれないんです。帰り道、気を付けてください。心臓が止まることもあるんです、冗談抜きで。Sさんがそうでした。退院がもう明日に控えていたのに、その晩心臓がパタリ止まったんです。20分間も止まったそうです。でも、主のあわれみによって、皆さんの祈りも主に応えて頂いて、奇跡的に心臓が再び動き、奇跡的に脳のダメージが今の段階ではないように、本当に元気に大分回復してきたわけです。まさに死からの生還を果たしたわけです。でも、そのおかげでSさんはイエス・キリストを信じる告白ができたんです。主がチャンスを与えたんです。そのままポックリ逝って、教会にも来たことがあるけれども、でもハッキリとイエスを信じるとは表明していなかった。だから本当に信じていたかどうか分からない。信じていて欲しいなあ、という淡い願望、希望的観測、それしかない。でも、彼女はその云わば主から与えられた命によって、その命を、イエスを信じる信仰告白をするための命として使ったわけです。イエス・キリストを信じますと。アーメンと言ったわけです。あなたの心臓も今晚止まるかもしれません。若しくはイエス・キリストが私たちを迎えに来られるかもしれません。あなたは間違いなく地上から引き上げられるでしょうか。それとも取り残されてしまうでしょうか。イエスを信じていなければあなたは地上に取り残されます。若しくは信じているつもりで、「クリスチャンらしくはやってきたけれども、クリスチャンぽくはやってきたけれども、でも今となってはイエスが迎えにきても本当に空中にまで引き上げられるかどうかはちょっと分からなくなってきました。私には自信がありません、確信がないんです。本当に今晚死んだら天国に間違いなく行けるかどうか。もしかしたら地獄に行ってしまうかもしれない。どうしよう、怖いな。」と思っているならば、今晚がひよっとしたら最後チャンスかもしれません。イエスを信じて下さい。そしてイエスがあなたの救い主であって、あなたの人生の土台になりたいと願っておられる。イエスは「この岩の上に私の教会を建てる。」と言われました。「イエスは生ける神の子キリストです。」というペテロのその信仰告白の上にイエスは教会を立てる。教会はあなたのことです。あなたが建てられるんです、岩の上に。イエスを信じるならば、その信仰告白の上にあなたという教会も建てられるんです。何があっても、ハデスの門もそれに打ち勝てないと言っています。ですから、そのような揺るがない土台をあなたも築きたいと願うならば、今晚がチャンスです。イエスを信じる決心をして下さい。クリスチャンのつもりでいた人も、あらためてイエスを信じる決心をして下さい。口先だけの告白だったかもしれません。ただの水浴びだけのバプテスマだったかもしれません。でも、主が今晚あなたにチャンスを与えられました。今日は22時をこれで回りましたので終わりたいと思いますけれども、

『山上の説教』、その結論が1番大事だったということですから、今までの学びは全部忘れて下さっても構いません。でも、最後の二者択一のところ。砂の上ではなくて、岩の上に建てられた土台を選ぶことだけ、それだけでも今晚出来るならば、この山上の説教の学びは有意義なもの、価値のあるもの、無駄ではなかったと言えるものになります。でも今晚それをあなたが選ばないで、若しくは砂の上に土台を求めようとするならば、そのほうが楽だし、確かに岩の上に建てるのは大変です。時間がかかります。すぐには家が建たないかもしれません。皆さんも家を建てたことがあると思いますが、土台が1番お金がかかるんです。なぜこんな見えない土台にお金をかけなきゃいけないのかと言って、手抜き工事をするると大変なことになります。多くのクリスチャンたちは、ひょっとしたら手抜き工事をしたような土台の上に自分の信仰を建てているかもしれません。すぐに揺らぐのは何故なのか。すぐに傾くのは何故なのか。もう一度土台作りをしなければいけないかもしれません。遅くはないということですから、今晚からでも。クリスチャンも遅くはないです。で、クリスチャンでない方は今晚から新しい土台をしっかりと築いて、そしてこれから先何があっても良いように備えていただきたいと思います。では、最後に祈りたいと思いますけども、是非クリスチャンでない方、そしてクリスチャンの方、自称クリスチャンの方、名ばかりのクリスチャン、なんちゃってクリスチャン、苦しいチャンの人、該当者いると思います。まあ、つまりは全員ということなんですけども、ぜひ一緒に祈って欲しいと思います。よく知っている昔からの有名なたとえ話で流さないで欲しいと思います。毎回聖書を読むたびに、毎回バイブルスタディーに出席するたびに、毎回礼拝に集うたびに、この2つに1つの選択が迫られているということです。時にじゃなくて、毎回です。毎日です、瞬間瞬間ということです。だから私はこの短い箇所をこんなにも時間をかけてクドクドと同じことを繰り返すようにして、強調して伝えているんです。私においてもこれが最後のメッセージであっても良いように今語っているんです。日曜日は来ないかもしれないので、今晚が私のメッセージの、教会における最後の説教のつもりで、告別説教のつもりで語っています。それは先週もそうでしたし、先々週もそうでしたし、数ヶ月前もずっとそのように私は語り続けています。皆さんもそのように真剣勝負のようにして聴いてほしいと思います。そうすれば絶対に後悔しないからです。私も後悔したくない。あなたも後悔したくない。共通の関心事があるはずです。牧師だけただ空回りしているんじゃないんです。牧師だけただ熱く語っているんじゃないんです。温度差があって冷たい・生ぬるいじゃなくて、みんな熱くなって欲しい。それがイエス・キリストの望みです。イエスはあなたに、岩の上に土台を建てて欲しい、と願っているんです。それがイエスの説教のハートだったわけです。ただ聞いて欲しいんじゃないんです。聞いた通りに行なって欲しい。そしてあなたには祝福されて欲しい。祝福された者になってもらいたい。幸いな者になってもらいたい。この八福の祝福に与っててもらいたい。それがイエスの願いです。応答して下さい。祈りの中で応答して下さい。では、一緒にお祈りしたいと思います。